

優秀賞

## 父からつなぐ

初芝富田林高等学校 1年 久保 信平

父が死んだ。ぼくが高校へ入学した直後の事だった。父はまだ子どものぼくに言った。「俺の店を継げ。お前のおじいちゃんから俺は託されたんだ。次はお前の番だ。」ぼくは返す言葉が出なかった。いや、出せなかったのだ。家族も何も言わなかった。父の店は老舗の旅館だった。父の葬式ではみんな泣いていた。ぼく以外は。あの言葉が気がかりで泣くに泣けなかった。そして、父の言うとおりに店を継いだ。入ったばかりの高校もやめた。旅館での生活は意外と楽しかった。みんなやさしくてお客さんもいい人ばかりですごくよかつた。中学の友達も来た。でも気持ちにはれなかった。旅館を継いでから毎日のように父の夢をみた。父が死んだ瞬間が何回もループする様な感じが出てきた。そりやそうだ。ぼくは大学に行く夢をあの時捨てたのだ。高校へ行きながら旅館をするのは難しいと言われたし。そもそも、学校がバイトなどを禁止していたのだ。だから夢を諦めたのだ。父の店を継いだ瞬間に。そんな事を思い出している、あるお客さんが話しかけてきた。「うかない顔してどうしたの。」「いや、大丈夫です。」「そう、あなた、やつぱりお父さんに似てるわね。」「え、それはどういう事ですか。」「あなたのお父さんもあなたと同じくらいの人に、この旅館を継いでね、あなたと同じ顔してたのよ。」「ぼくは固まってしまった。その人は続けてこう言った。「あなたのお父さんはそれでも夢を諦めなかったの。学校へ通いたくてがんばっていた。そして高校へ行ってちゃんと大学まで行ったの。」「ちなみに言っとくけど、あなたのお母さんとお父さんは大学で出会ったのよ。」衝撃だ。そんな事が父にあったなんて。それと同時にになにかが落ちたような気がした。あのお客さんがなにかはわからなかったが、僕はすこし大人になった気がした。僕が父から継いだのはこの旅館だけじゃなくて、父の想いやそれとも他の何かなのかもしれない。